



和土小だより



児童数	男子	98名
	女子	75名
	総計	173名

発行責任者 校長 辻 美由紀



豊かなコミュニケーションは「あいさつ」から

校長 辻 美由紀

6年生の子ども達と修学旅行に行つてまいりました。昨年度は、感染症拡大への配慮から県内への日帰りとなりましたので、二年ぶりの宿泊を伴う行事となりました。さすが、和土の最高学年、宿での過ごし方、訪問先の見学の仕方、そしてお世話になった方へのあいさつ等、とても立派で感心しました。一般の観光の方も多くなった時期でしたが、日本の伝統や文化に触れ、秋から冬へと移りゆく季節を体感することができました。他の学年も、バスに乗って出かける校外学習を実施し、学校の中では学ぶことのできない貴重な体験をしています。子ども達の嬉しそうな様子を見ると、私達も「実施できてよかった」と嬉しくなります。一方で、感染症の収束状況を素直に受け入れてよいものやら…若干複雑な気持ちで、感染予防策には念を入れているところです。

校外学習も一段落し、校内での子ども達の生活も徐々に活発になってきました。コミュニティ・スクールとしての学校運営協議会でも話題になっていましたが、和土小の子ども達も「あいさつの大切さ」は、気になっていたようです。ここで、皆さんと一緒に考えたいのですが、日頃、あいさつをするのはなぜですか？

もしかしたら、「元気にあいさつをしよう」というきまりになっているから、と考えている子ども達もいるかもしれません。本当は、しなくてもいいのでは…と思っている人はいませんか。児童会の話し合いでは、「あいさつは、する人もされた人も気持ちのいいもの」「心が通じ合う大切なもの」等、日頃の生活の中で感じていることから、意見が交わされていました。子ども達自身もその大切さを感じ、活動に取り上げてくれていることを嬉しく思いました。実は、私達、学校の教職員も和土っ子達と交わす朝のあいさつをととても大切にしています。いつもよりいい笑顔で声にも張りがある…何か、いいことがあったかな、と考えたり、いつもより元気がないみたい…何か心配なことがあるのかな、と言葉をかけたりするのです。教職員同士も自然と互いにあいさつを交わしています。私は、同じ時間、空間を気持ちよく過ごそうという気持ちから自然と交わされているのでは、と考えています。不審者等の情報もある昨今、「よく知らない人には…」と躊躇する気持ちは分かりますが、まずは、家族から、学校の先生や友達とそして、和土っ子を見守ってくださっている地域の方と心からの挨拶を交わすことができたなら、素敵だな、と考えています。4月にご覧いただいた本校のランドデザインには「明るいあいさつ 響く和土地区」と目指す姿をお示ししています。

さて、元NHKアナウンサーの鈴木健二さんが、右にお示ししたような言葉を残されています。インタビュー等で多くの方と関わる中で感じられたことなのでしょう。挨拶を交わし、こちらが心を開いて相手に向かい、相手の方も心を開いて応じてくれる、そんな時は、話題が深まるいいお話になるのでしょうか。和土地区でも、明るく響くあいさつが、子ども達と地域の皆様をつなぐ豊かな関わり、コミュニケーションに育っていくことを願います。

寒暖の差が大きな日が続いております。保護者、地域の皆様におかれましては、お身体ご自愛くださいませようお祈り申し上げます。今月中旬に計画しております「和土小学校あいさつ運動」には、保護者、地域の皆様の一人でも多くの方のご協力をいただきたく、御理解、御協力をお願いいたします。

挨拶とは何か、

それは『心を開いて相手に迫る』ということです。

(元NHKアナウンサー

鈴木 健二さんの言葉)

未来に向かって力強く生きる ひとみ輝く 和土っ子の育成

○やさしい子 ○かしこい子 ○たくましい子

やさしさいっぱい 力いっぱい やる気いっぱい

